

分類名 [水稲]

1 水稲品種「まなむすめ」の栽培法

古川農業試験場・農業センター

1) 取り上げた理由

平成9年奨励品種に採用した「まなむすめ」はいもち病や倒伏に強い。これらの性質を生かし、多収で高品質米を安定生産するための施肥法及び栽植密度について、目安を明らかにしたので普及技術とする。

2) 普及技術

- (1) 基肥窒素量は「ひとめぼれ」と同程度とする。
- (2) 追肥は10a当たり窒素2kgを幼穂形成期に1回施用を標準とする。
- (3) 栽植密度は20.8～23.8株/m²程度、植付け本数は5本/株程度とする。
- (4)刈取始期は、「ひとめぼれ」より1～2日遅れを目安とする。

3) 対象地域等

西部丘陵地帯の一部、三陸沿岸地帯

4) 特に留意すべき事項

- (1) 利用上の留意点
 - a 「ひとめぼれ」に比べ1株当たりの穂数が少ないので、上記の栽植密度の確保に努める。
 - b その他の管理は「ひとめぼれ」に準ずる。
- (2) 残された問題点
 - a 倒伏限界についての検討。

5) 背景となった主要な試験研究の概要

- (1) 研究機関及び担当部科名 古川農業試験場 栽培部 作物科・環境科
宮城県農業センター 農産部 稲作科

- (2) 研究課題名及び研究期間

新品種栽培法の早期確立 平成8～9年

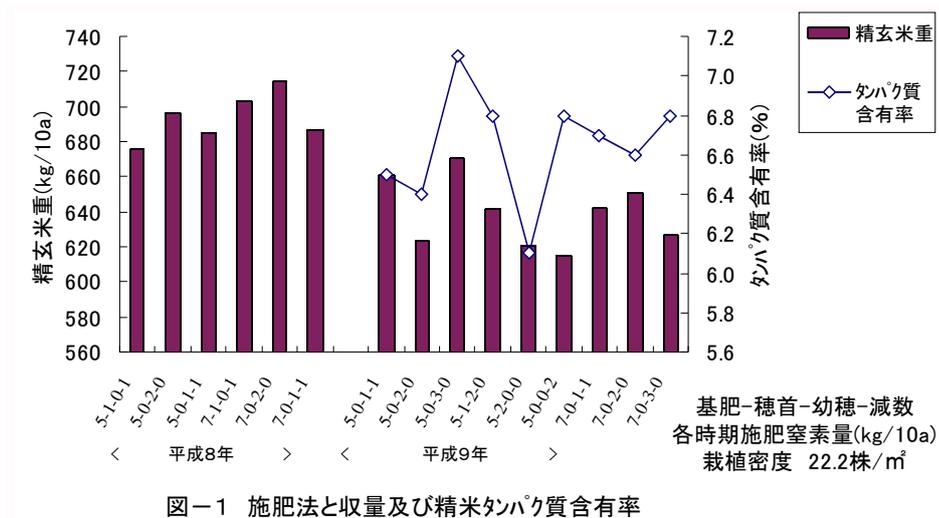
商品性の高い宮城米の高水準安定生産技術の確立 平成8～9年

- (3) 参考データ

- a 基肥量は多窒素(7kg/10a)でタンパク質含有率が高まる傾向にあることから、「ひとめぼれ」程度が適当と思われた(図1)。
- b 追肥は収量を確保しつつ、タンパク質含有率を低く抑えるためには、幼穂形成期に窒素2kg/10aを1回、または幼穂形成期と減数分裂期に窒素1kg/10aを各1回、穂首分化期に窒素2kg/10aを1回のいずれかが適当とみられたが(図1)、追肥作業の省力化と「まなむすめ」が倒

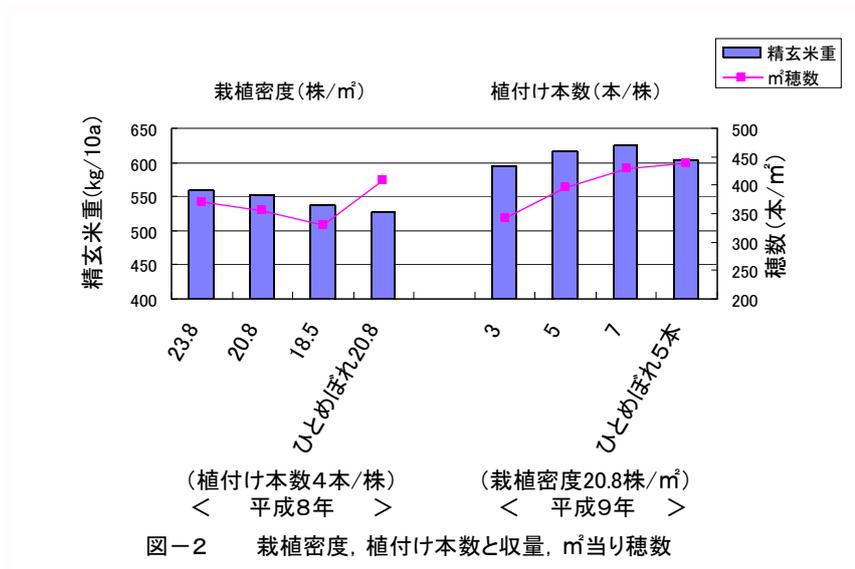
伏に強いこと、穂首分化期の判断がしにくいことから、幼穂形成期に窒素 2 kg/10a を 1 回施用が適当と思われた。

- c 栽植密度は 18.5 株/m² では収量がやや劣ることから 20.8~23.8 株/m²，植付け本数は 5~7 本/株が適当とみられたが（図 2），コスト面から 5 本/株が有効と思われた。
- d 「まなむすめ」の耐倒伏性は「ひとめぼれ」に比べ明らかに強かった（表 1）。
- e 「まなむすめ」の成熟期は西部丘陵地帯で出穂後 43~52 日であり，三陸沿岸地帯で出穂後 50~52 日であり，「ひとめぼれ」より 1~2 日遅かった（表 2）。



図一 施肥法と収量及び精米タンパク質含有率

(古川農業試験場，基肥窒素量 5 kg/10a は「ひとめぼれ」の標準量である。)



図二 栽植密度，植付け本数と収量，m²当り穂数

(農業センター)

表-1 栽植密度別の倒伏度

品 種	倒伏度	
	栽植密度20.8株/m ²	23.8株/m ²
まなむすめ	0	7
ひとめぼれ	33	57

農業センター，平成8年
倒伏度 0～4の5段階×倒伏面積率

表-2 地帯別の「まなむすめ」「ひとめぼれ」の出穂期，成熟期（奨励品種決定調査）

地 帯	場 所	品種名	試験年度	出穂期(月/日)	成熟期(月/日)	登熟日数(日)
西部丘陵	小野田	まなむすめ	平成7～8年	8/13(8/11～14)	9/29(9/23～10/ 5)	47(43～52)
		ひとめぼれ	平成7～8年	8/13(8/12～14)	9/28(9/21～10/ 4)	46(40～51)
三陸沿岸	河 北	まなむすめ	平成7～8年	8/ 9(8/ 6～12)	9/29(9/25～10/ 3)	51(50～52)
		ひとめぼれ	平成7～8年	8/10(8/ 5～14)	9/27(9/20～10/ 4)	48(46～51)

(4) 発表論文等

特になし